

Abraham と息子たちの功利 : Dracula における墮落した女と家父長の継承

浅田, えり佳
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24555>

出版情報 : 九大英文学. 53, pp.1-21, 2011-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

Abraham と息子たちの功利

—*Dracula* における墮落した女と家父長の継承

浅田 えり佳

．序論

アイルランド出身の Bram Stoker によって書かれた *Dracula* は、吸血鬼物語の金字塔とされている。この小説は怪物退治をテーマとした通俗小説と思われがちであるが、その実、研究に値する文学的価値を内包している。この小説の概要は以下のとおりである。

イギリスの弁理士である Jonathan Harker は、ロンドンに土地を購入したいというトランシルヴァニアの貴族である *Dracula* の居城を訪れるが、その正体は恐ろしい吸血鬼であり、Harker は城内に幽閉されてしまう。*Dracula* と彼の同胞である女吸血鬼たちへの恐怖に苛まれた Harker は決死の脱出に成功するが、精神を病んでしまう。一方 *Dracula* はイギリスに上陸し、Harker の婚約者 Mina Murray の親友 Lucy Westenra を襲う。Lucy は日に日に弱り、彼女の求婚者の一人である精神科医 John Seward の依頼により、アムステルダムから Abraham Van Helsing 教授が診察に訪れる。彼は Lucy の症状が吸血鬼によるものだと気づき、Lucy の求婚者達とともに彼女を救おうとするが、その努力もむなしく Lucy は吸血鬼となって子供を襲い、婚約者の Arthur Holmwood により胸に杭を打ち込まれて滅びるのだった。一方、弱った Harker と結婚した Mina が彼の日記を Van Helsing に読ませたことで、自分たちの敵が同じだと知った Harker と Van Helsing たちは、カーファクス の *Dracula* の屋

敷を襲撃するが、その際に Mina が血を吸われてしまう。彼らはロンドン内の残りの Dracula の拠点をつきとめ、根城を失った Dracula はトランシルヴァニアへ敗走する。吸血鬼になりかけている Mina は精神的に Dracula と繋がっており、Van Helsing は催眠術で彼女から Dracula の動向に関する情報を聞きだす。それによって Van Helsing らは Dracula を追いつめ、吸血鬼たちを滅ぼすことに成功するのだった。

Dracula での主要な女性は、Lucy の母親を除いて皆吸血鬼、あるいは吸血鬼になりかけている状態である。過去や名前などが無視され、人間としての個性を剥奪された Dracula 城の女吸血鬼たちは肉体の魅力だけを強調されており、女吸血鬼というものが性的に墮落した女を示していると考えられる。一方で男性達は masculinity が強調されており、彼らの導き手が Van Helsing という一人だけ高齢で父親的な人物あることから、男性優位の概念が物語の根底にあると言えるだろう。その中で女吸血鬼は、彼女らを支配する男に牙をむき、既存の男尊女卑的な階層構造を侵す危険分子なのである。しかし男たちに危害を加えることは出来ないまま、彼女たちは男の手で罰を受ける。墮落した女に対する男たちの恐怖や断罪というテーマについては今まで多く研究されてきたが、本発表ではそれに加えて、作品世界での家父長的な存在が男女間の sexuality にまつわる問題に強い影響を与えており、家父長自身もまた吸血鬼に脅かされていること、そして吸血鬼退治は男尊女卑的な秩序の再構成の試みであると同時に、家父長による家の再建の試みでもあるということを論じていきたい。

．吸血の意味

まず吸血鬼の吸血行為が、一つには食べ物の摂取、もう一つには性行為の代替という二つの側面を持っていることに着目したい。

“The blood is the life! the blood is the life!” (155)

これは、Seward の患者である狂人 Renfield の発言である。彼は虫や小動物を

食べて生命力を得ようとする、人間ながらに擬似的な吸血行為を試みていた人物である。血液は生命そのものであり、それを他の生き物から摂取するという行為は、生命を維持するためのエネルギーを得ているということになる。また、以下の通り、Harker は Dracula が食事するところを見たことがないと記録している。

It is strange that as yet I have not seen the Count eat or drink.
(50)

食事をしない吸血鬼にとって、吸血は食事の代替行為であるといえるであろう。

一方、性行為との関連については、Lucy の例が示す通り、吸血鬼は吸血により同胞を増やすという点がまずあげられる。また、Bram Dijkstra は *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-De-Siecle Culture* で、当時の医学博士・William J. Robinson の著作を引用し、女性の持つ精液と血への飢えは同一視できると主張している。

William J. Robinson, . . . author of a popular guide to *Married Life and Happiness*, published, appropriately, by the Eugenics Publishing Company of New York in 1922, spelled out the issue in clear and simple language. . . .

there is the opposite type of woman, who is a great danger to the health and even the very life of her husband. I refer to the hypersensual woman, to the wife with an excessive sexuality. It is to her that the name vampire can be applied in its literal sense. Just as the vampire sucks the blood of its victims in their sleep while they are alive, so does the woman vampire suck the life and exhaust the vitality of her male partner—or victim. And some of them—the pronounced type—are utterly without pity or consideration (90).

Robinson was positing as a scientific commonplace a direct equation between woman's supposed hunger for seminal substance and her bestial blood lust. (Dijkstra 334)

これらのことから、作中で度々行われる血液の移動は性行為に準ずると考えられる。しかも単なる性行為というだけではなく、同じ血を共有する一族を増やすという繁殖行為なのだ。

しかし吸血鬼の吸血行為は、繁殖行為としては不完全である。なぜなら吸血自体はあくまで疑似的な性行為に過ぎず、それによって新たに子供は生まれ得ないからである。当時においては結婚の最大の目的のひとつであるはずの出産を念頭に置かない男女の関係は、特に“the angel in the house”という良妻賢母をよしとするヴィクトリア朝の価値観からすれば、道徳的であるとはいえないだろう。そして、前述の通り、吸血鬼とその伴侶は同時に捕食者と被食者という関係にあり、吸血鬼は食餌である吸血をやめることはできない。つまり彼らは常に新しい獲物兼伴侶を求め続けるのだ。そういう理由から、必然的に吸血鬼の結婚は重婚とならざるをえないため、吸血とは特に非道徳的な性行為を表すものとなる。

・ 吸血鬼により墮落する女たち

次に、作品の中で Dracula に吸血される二人の女性について考えてみたい。Lucy と Mina はともに Dracula に血を吸われるが、Lucy は吸血鬼と化す一方で Mina は助かる。彼女たち二人の違いには、男性に対するあり方が大きく関わっていると考えられる。

Dracula に吸血され衰弱した Lucy は輸血を受けることになるが、血液提供者は Lucy の婚約者 Arthur Holmwood とその他の求婚者である John Seward に Quincy Morris の二人、そして Van Helsing と、すべてが男性である。ここで問題なのは、輸血もまた吸血と同じく血液の移動であるということだ。

“Mind, nothing must be said of this. If our young lover should turn up unexpected, as before, no word to him [Holmwood]. It would at once frighten him and enjealous him, too. There must be none. So!” (144, emphasis added)

これは、貧血状態にある Lucy を助けるために輸血をした後の Van Helsing と Seward の会話である。Van Helsing は自分たちが Lucy に輸血をしたことを、「驚き、嫉妬するから」という理由で彼女の婚約者 Holmwood に秘密にしておくよう Seward に指示しており、Seward もまたそのことを決して Holmwood に打ち明けまいと考えている。当時は貧血の治療のために動物の血が飲まれており、血液を摂取するということ自体はタブーではなかった。それなのに輸血をしたことで婚約者に気兼ねをするというのは不自然である。

When it was all over, we were standing beside Arthur, who, poor fellow, was speaking of his part in the operation where his blood had been transfused to his Lucy's veins, I [Seward] could see Van Helsing's face grow white and purple by turns. Arthur was saying that he felt since then as if they two had been really married, and that she was his wife in the sight of God. None of us said a word of the other operations, and none of us ever shall. (185)

この場面で何も知らない Holmwood が、自分が Lucy に輸血をしたことは結婚と同義だと語り、それを聞いた Van Helsing は動揺を見せている。頑なな血液提供者たちの秘密協定は、婚約者がいる身の女性に婚約者以外の男性が輸血をすることへの負い目があることを示していると言える。Van Helsing に至っては、Seward と前述の Holmwood の言葉について会話した際、冗談ながらも Lucy を“polyandrist”と表現している。

“Said he [Holmwood] not that the transfusion of his blood to her [Lucy's] veins had made her truly his bride? . . . If so that, then what

about the others? Ho, ho! Then this so sweet maid is a polyandrist, and me, . . . who am faithful husband to this now-no-wife, am bigamist.”
(186)

つまり Lucy は象徴的なレベルにおいて、婚約者以外に複数の男性と性的な関係を持ったと考えられる。そのように不義密通を犯した Lucy は、夫として彼女を罰する権利を持つ Holmwood により、肉体に杭を打ち込まれるという暴力的かつ象徴的な方法で処罰されてしまう。

Lucy の死後、今度は Harker の妻 Mina が Dracula の標的にされるが、彼女と Lucy とでは以下の三つの点で差異があると考えられる。一つ目には吸血の様子、二つ目には吸血に対する自覚の有無、そして女としての貞淑さの度合いである。まずは吸血の様子についてだが、Lucy の場合と違って、Mina は吸血された上に Dracula の血を摂取させられてもいる。Mina と Dracula がこのようにお互いに相手の血を摂取したということは、その他の一方的な吸血行為とは違い、この吸血がより相互的な婚姻という意味合いを帯びると考えられる。以下は Mina が襲われる場面の描写の一部である。

Her *white nightdress* was smeared with blood, and a thin stream trickled down the man's bare breast which was shown by his torn-open dress.
(283, emphasis added)

この“white nightdress”はウェディングドレスを連想させる。また、トランシルヴァニアの女吸血鬼たちは、吸血を“kiss”と称してもいる。

“He is young and strong; there are *kisses* for us all.” (61, emphasis added)

このことから、Mina と Dracula の相互吸血もまた、婚姻の儀式の一部を示唆しているといえるのではないか。John Paul Riquelme は“Doubling and Repetition/Realism and Closure in *Dracula*”という論文で、Mina と Dracula の擬

似的な婚姻に関して以下のように述べている。

When Mina urges Van Helsing to come with her “to meet my husband who is, I know, coming towards us,” he describes her as a compound creature, pale, thin, and weak but with eyes that “glowed with fervour” (p. 363). Van Helsing does not seem to recognize, however, that her statement about her husband’s coming toward them can refer either to Harker or to Dracula. If she knows that Harker is coming, it is only because she is in telepathic contact with the vampire. She may, in fact, consider Dracula to be her husband. (Riquelme 571)

Riquelme は、Mina が *Dracula* の城にたどり着く直前に発した“to meet my husband who is, I know, coming towards us,”という言葉の“husband”は Harker ではなく *Dracula* を指していると指摘している。このとき Mina は Harker が近くに辿り着いていることを知るはずがなく、意識を共有できる状態にあった *Dracula* の存在の方を感知し、自らもまた吸血鬼になりかけていたために彼を“husband”と呼んだのではないかというのである。以上のことから、Mina は Harker と *Dracula* の二人と婚姻関係を結んだと考えられるのだ。最後まで結婚の儀式を経験することなく、複数の男性と象徴的に関係を持った Lucy とは違うのである。

次に吸血に対する二人の自覚の有無について考察する。夫以外の男から吸血された Lucy と Mina だが、Lucyの方は牙の傷跡や *Dracula* のもたらす不可解な現象に気づきながらも、吸血されたという事実は無自覚だった。それに対して Mina は、初めの内こそ吸血の事実気づかなかったが、吸血の現場に Van Helsing らが踏み込んだ夜に、自分が吸血され、同時に血を飲まされたという事実をはっきりと認識し、自らを穢れた女だと酷く嘆いたという違いがある。

“Unclean, unclean! I must touch him [Harker] or kiss him no more.”
(285)

更に、カトリックの作法に明るく、その点で司祭的な性質を持つ Van Helsing の前で吸血の仔細を告白する Mina の様子は告解のようでもある。このような違いは、不道德な行為に対する Lucy と Mina の意識の違いを示していると考えられる。つまり Lucy は見知らぬ男との関係を悪として認識できないばかりか、結果的に輸血を通して複数の男性と性的な関係を持ったのに対し、Mina の方は自らの不貞の罪を自覚し、それを雪ぐために夫たちについてトランスシルヴァニアまで危険な旅に身を投じた。この点においては、Lucy が異性に対して警戒心が薄く、成人女性としては精神的な未熟さが描かれているということも重要であろう。理知的で社会によって教育され、強い母性を持った女性である Mina に対し、Lucy は子供に近い分、より本能を抑制する力も弱く、そんな Lucy が吸血鬼となったことは、女性の本質に強い性への欲求が潜在するということを描いているのではないか。

三つ目の貞淑さの差については、Lucy の方が保守的な淑女としての生い立ちを与えられてはいるが、Mina の方がより夫に対して献身的であると言える。Lucy は三人から求婚されたことや、ホイットビーの老人たちの態度とそれに対する Mina の記述から鑑みるに、Lucy の方が美貌の点では勝っていたようである。社会的な身分も Lucy の方が恵まれているのは、Holmwood という貴族階級の婚約者がいることや、寡婦で無職ながら三人も女中を雇っている Westendra 夫人の暮らしぶりからも明白である。それに対して Mina は女教員として働いていた中産階級の女性で、夫の Harker も弁理士で中産階級の男性である。Mina は自分の速記やタイプライティングの技能を夫の稼業に役立てることを目標としていて、Lucy とは全く違う境遇にあることがわかる。一見して社会進出している Mina の方が、男性に対し敵対的な“New Woman”の一人であるように思えるが、最終的に Lucy は死に、Mina は幸福な家庭を築いているのである。以下は Lucy から Mina に宛てた手紙の一文である。

“Why can't they let a girl marry them three men, or as many as want her, and save all this trouble?” (80)

このように、Lucy は Mina への手紙で潜在的な重婚願望を見せ、前述の通り複数の男性から輸血も受けており、性的な奔放さを内包していると考えられる。それに加えて、三人の求婚者のうちから一人を選ぶという男性に対し優位な立場にもあったのだ。それは男性たちを惑わす墮落した女の危険な魅力の産物であった。他方 Mina は職業婦人ではあるが、Harker と婚約すると退職し、将来事務所を経営することになる彼の為に役立つ技能を習得しようとするなど、夫に対して従順な部分が強い。これらのことから、*Dracula* 内の批難されるべき女性像は、社会的に自立した女性ではなく、性的に墮落し、男性に従わない女性であると考えられるのだ。Sos Eltis は、“Corruption of the Blood and Degeneration of the Race: *Dracula* and Policing the Borders of Gender”の中で、*Dracula* は女性の中の性的欲求を喚起すると同時に母性を奪う存在だとしている。

Vampirism infects women with masculine sexual aggression and perverts their maternal instincts into an appetite for infant blood; . . . (Eltis 456)

確かに、最終的に母親となった Mina とは対照的に、Lucy は子供を吸血の獲物としており、その様子は母性の欠落と考えられるだろう。*Dracula* における悪しき女性が性的に墮落した娼婦であるなら、良き女性とは、男性に対し従順で、まさに“the angel in the house”が示すような、出産と子育てに従事する母なる女性を示すと言える。以下は Carol Sanf の *Dracula: Between tradition and modernism* の一部である。

Attempting to explain this emphasis on motherhood, Kline . . . notes that Hebrew theology made woman the cause of all sin and argued that the pain of childbirth is women's payment for Eve. Kline adds that “Christians . . . were more optimistic and hopeful: woman's suffering in giving birth would also be the source of her salvation. . . . Mina, too, is ultimately redeemed by her childbearing.” (Sanf 53)

Sanf は、Salli Kline による原罪と産みの苦しみの相関関係に言及しているが、出産が、誘惑者に負けてアダムを唆したというイヴの罪の償いであるならば、Mina の出産もまた誘惑者である吸血鬼に負けて夫を裏切ったという罪の償いという側面があるといえるのではないか。以上のように、女吸血鬼たちとそれに準ずる Mina は、形はどうあれ皆吸血という擬似的な性行為を不適切な相手と交わしているのである。この点において彼女たちは性的に墮落しているとみなされるのだが、Mina は夫に対して従順であり、不貞に対する罪悪感を抱いて浄化を強く望んだ。そして Van Helsing が“pearl among women” (336)と称賛する Mina は、初めて対面した Holmwood に対し以下のように母性を発揮する。

We women have something of the mother in us that makes us rise above smaller matters when the mother-spirit is invoked; I felt this big, sorrowing man's head resting on me, as though it were that of the baby that some day may lie on my bosom, and I stroked his hair as though he were my own child. (236)

つまり、Mina は“the angel in the house”としての適性を持っているのである。以上の理由から、Mina は墮落した女として罰を受けることなく、破滅から逃れられたのだと考えられる。

． 危険な女としての吸血鬼と杭打ちによる断罪

墮落した女はLucyやMinaだけではない。Dracula城には三人の女吸血鬼が住んでいるが、彼女たちもLucy同様子供を餌食としている。

“Are we to have nothing to-night?” said one of them, with a low laugh, as she pointed to the bag which he had thrown upon the floor, and which moved as though there were some living thing within it. . . . One of the women jumped forward and opened it. If my ears did not deceive

me there was a gasp and a low wail, as of a half-smothered child. (63)

これもまた、女吸血鬼たちの母性の欠落を示す描写であると言える。それに加えて、彼女たちには名前も与えられず、性格も吸血鬼としての残忍さが描かれるだけで没個性的である。ただ肉体の官能的な魅力のみが繰り返し強調されているのだ。以下は彼女たちの作品中の描写の一部である。

All three had brilliant white teeth, that shone like pearls against the ruby of their voluptuous lips. (61)

上記は幽閉中に吸血されつつある Harker の感想であり、彼女たちを目の前にした Van Helsing も彼女達の肉感的な魅力に屈服しそうになる。

She lay in her Vampire sleep, so full of life and voluptuous beauty that I shudder as though I have come to do murder. . . . Yes, I was moved – I, Van Helsing, with all my purpose and with my motive for hate – I was moved to a yearning for delay which seemed to paralyse my faculties and to clog my very soul. (361)

Harkerが幽閉されている間、彼女たちは順番にHarkerに“kiss”、つまり吸血しようと試みる。吸血が性行為に準ずるとするならば、この行動は彼女たちも墮落した女たちであることを示していると考えられる。

また、女吸血鬼たちの“kiss”は、他にも重要な意味を持つ。彼女たちと“kiss”されかけたHarkerの間では性行為における男女の立場が逆転してしまっているのである。

I could feel the soft, shivering touch of the lips on the supersensitive skin of my throat, and the hard dents of two sharp teeth, just touching and pausing there. I closed my eyes in a languorous ecstasy and *waited – waited* with beating heart. (62, emphasis added)

ここでは Harker は彼女たちから吸血されるのを待ち望んでいることが描かれているが、これは Harker が吸血という象徴的な性行為において受動的立場になっていることを示している。ところが、彼女たちの吸血は Dracula の登場により未遂に終わってしまう。Lucy も含めて女吸血鬼たちは吸血によって男たちに危害を加えようと試みるものの、結局は一人たりとも危害を加えることができずに終わり、男の手によって断罪される。以下は Holmwood によって Lucy が杭を打たれた後の描写である。

There, in the coffin lay no longer the foul Thing that we had so dreaded and grown to hate that the work of her destruction was yielded as a privilege to the one best entitled to it, but Lucy as we had seen her in her life, with her face of unequalled sweetness and *purity*. (224, emphasis added)

Lucy をはじめ、女吸血鬼たちを滅ぼした方法は、杭を体に打ち込むという、これもまた性的なメタファーに満ちたものであった。Dracula も同じかという、彼の殺害方法はまた別のものであった。

But, on the instant, came the sweep and flash of Jonathan's great knife. I shrieked as I saw it shear through the throat; whilst at the same moment Mr. Morris's bowie knife plunged into the heart. (367)

以上のように、Dracula はナイフによって滅ぼされているのである。混戦の最中という状況にしても、女吸血鬼たちを滅ぼした儀式的な作法に比べれば非常に中途半端であり、彼に対する杭打ちはなされないままに物語は終わってしまうのである。このように、Lucy らと同じ吸血鬼でありながら、唯一男である Dracula が一人だけ違う方法で滅ぼされている点も、杭打ちに性的な意味が含まれていることを裏付けていると言える。Van Helsing らの血腥い儀式は、表向きは邪悪な怪物を神聖な目的の下に追いつめ滅ぼしたように描かれ

ているものの、杭打ちの示す意味を考慮すると、邪を聖なる儀式で制するというだけではなく、女を男だけが持つ暴力で屈服させるものだと言えるだろう。杭を打たれた Lucy の顔に“purity”が戻ったとされている点も、Lucy が宗教的な儀式によって邪悪な吸血鬼から解放されたと同時に、夫に準ずる男性により罰を与えられたことで、女性としての清廉さも取り戻すという二重の浄化を受けていると考えられるのである。

・家父長かつ司祭としての“Abraham”

女吸血鬼たちを倒した方法自体が性的なメタファーであるとするならば、同様にその行為を行った人物にも注意すべきだろう。Lucy は婚約者である Holmwood によって杭を打ち込まれている。彼は Lucy の婚約者なので、不貞を働いた妻を夫が罰するという構図との間に齟齬はなく、この行為は杭打ちがふしだらな女への男からの罰であるという推論を補強すると考えられる。トランシルヴァニアの女吸血鬼たちは素性が全く語られていないが、仮に彼女たちが吸血によって *Dracula* の伴侶となっていたのだとしても、吸血による関係は多夫多妻的で、*Dracula* が彼女たちを不貞の罪で罰することはありえない。*Dracula* 自らが Harker の共有を彼女たちに約束した事実もそれを示している。

“... Well, now I promise you that when I am done with him you shall kiss him at your will. . . .” (62-63)

そこでこの墮落した女たちに罰をくだす役目を Van Helsing が果たすのだ。前述のとおり、Van Helsing はオランダの精神医学者だが、その本質は家父長でありカトリックの司祭であると考えられる。他の登場人物が青年であるのに対し、Van Helsing だけ六十歳と親子以上に年が離れており、以下の引用からも、彼にとって Holmwood らは息子のような存在なのだということが読み取れる。

“... My heart bleed for that poor boy – that dear boy, so of the age of mine own boy had I been so blessed that he live, and with his hair and eyes the same. . . .” (185)¹

また、彼の名 Abraham は聖典の民の父祖ものであると同時に Stoker が父親から受け継いだ自分の名前でもあり、この Abraham という名は Stoker にとって父系を象徴する名前であったと考えられる。² 聖典の民の父祖の Abraham は息子を生贄に捧げようとし、その行為は彼の信仰心の強さを象徴するものとされているが、同時に彼が息子の生殺与奪権を握る強力な家父長の象徴であることも示している。それに加えて、Van Helsing は「因習的で迷信的な東欧」対「文明化された先進的な西欧」という対比の中で、西欧側に属しながらも宗教的な手段で吸血鬼に対峙しようとしている。彼はプロテスタント国の人間であるにも関わらず、聖餅や聖水などカトリックの作法に通じており、彼がカトリック司祭的な側面を持っていることは明白である。つまり Van Helsing は作品全体における家父長であり、司祭なのである。男性優位の象徴的人物である Van Helsing は、揺らいだ男尊女卑の秩序を回復させるため、Holmwood に不貞をはたらいた妻を夫として断罪するよう唆したのだ。

家父長制度は、家父長権が強い時期には家族の生殺与奪を家長が自由にできるものであり、紀元前のローマでは不貞行為をはたらいた妻や娘を家父が殺すこともあったという。勿論、十九世紀でこのような極端な家父長権が許されるわけはなく、実際に家法に反したからといって殺してしまうことなどはあり得ないが、不貞は罰せられるべきという認識は存在していた。Lucy や女吸血鬼たちの殺害は、人間でなく吸血鬼という化物であったからこそ殺人というタブーから解放され、神の名の下に悪しき者を清めるという名目で、血なまぐさい粛清が実行され得たのである。Van Helsing に家父長と同時に司祭的な性質が強調されているのは、*Dracula* 内で行われる墮落した女に対する暴力的な報復に、聖戦という覆いを被せる役割があると考えられるのだ。

．失われた sexuality の回復

これまでに述べたとおり、女吸血鬼は性的に墮落した女たちであり、吸血鬼退治の目的のひとつは、吸血鬼によって覆された男女間の上下関係の再構築にあると言える。吸血鬼化した女たちは攻撃的で母性を喪失し、性的積極性を示すなど、ある意味で男性的な部分が強くなっていたが、このような逆転は男性側にも起きており、それは Harker に顕著である。前述した女吸血鬼に対する受動性が最たるものだが、その吸血が行われようとしていた部屋は女性用の部屋であり、Harker はその場所で、想像上の部屋の過去の女主人と自分の行動を重ねている。

Here I am, sitting at a little oak table where in old times possibly some fair lady sat to pen, . . . and writing in my diary in shorthand all that has happened since I closed it last. (59-60)

その直後に女吸血鬼たちに襲われるのだが、彼を吸血の危機から救ったのは Dracula だった。Dracula は烈火のごとく怒り、女吸血鬼たちに対して次のような言葉を浴びせる。

“How dare you touch him, any of you? How dare you cast eyes on him when I had forbidden it? . . . This man belongs to me! . . .” (62)

この発言から、Dracula が Harker を吸血の対象と見ていたことは間違いない。吸血とは擬似的な性行為であった。そしてこの発言の後、吸血鬼たちのやりとりは“love”に及ぶ。一連の会話の流れの中で、吸血から“love”へ続くということは、それまでに話していた吸血に性愛的な意味が含まれることを暗示していると考えられる。つまり、女吸血鬼たちにとって Harker が欲望の対象であったと同時に、Dracula もまた Harker を同性愛の対象とみなしていたと言えるのである。また、Harker は城から脱出してロンドンに帰還した後、街中で Dracula を見かけてヒステリーの発作を起こす。ヒステリーは作中で

Seward が記録しているとおり、当時は女性特有の神経症だと考えられていたため、これもまた Harker の女性化の一端であると考えられる。加えて彼は、Dracula の術で気絶させられ、その間に妻の Mina を奪われている。前述の通り Dracula と Mina の相互吸血は擬似的な婚姻なのだが、これは Mina が Harker と Dracula の二人と並行して婚姻関係を持っていたというよりは、Harker との結婚が不完全であった可能性がある。なぜなら、Harker 夫妻が結婚するよりも前に、Dracula によって Harker の masculinity は奪われていたからである。女性化していた Harker には Mina を守るどころか、Mina が吸血されている間目を覚ますこともなかった。Harker には彼女を巡り、男として Dracula と争う資格すらなかったのだ。

また、Dracula のとどめをさした人物に、婚約者を殺された Holmwood が含まれず、Harker と Quincy であることも注目すべき点だろう。アメリカ人である Quincy が Dracula にとどめをさしたことについては、丹治愛氏が指摘しているように、アメリカへの潜在的な恐怖が関わっていると考えられるが、男性権威の回復という観点では Harker と Holmwood の二人の比較が重要である。Holmwood が Dracula にとどめをさす人物に含まれなかった理由は、Lucy を断罪した時点ですでに彼の夫としての名誉は回復していたからだと考えられる。一方で同性愛の対象にされ、妻も奪われた Harker にとっては、その元凶である Dracula を滅ぼすことのみが唯一自らの masculinity と権威を回復する手段だったのである。なぜなら Lucy と違って Mina は自らの罪を自覚しており、彼女の吸血は夫として彼女を守れなかった Harker の masculinity の欠如に起因しているからである。彼の masculinity を奪ったのは Dracula であり、奪われたものは奪った相手から取り戻すほかなかったのである。Mina も彼と共にトランシルヴァニアへ吸血鬼を追うが、これもまたそうすることで妻としての貞節と名誉の回復を図ったからであろう。Harker 夫妻はともに sexuality に付随する価値、たとえば作品中で度々礼賛されている男性の強靱さや女性の貞淑などを Dracula に奪われ、それらを取り戻した後に息子を授かっている。これは彼らが健全な夫婦関係を築きうる良き男と女に戻ったことを意味していると考えられるのだ。

・家父長による家の再構築

以上の様に、吸血鬼は女性を性的に墮落させ、masculinity をも奪っており、それらを吸血鬼の出現以前の状態に戻すために吸血鬼退治が行われたということ論じてきたが、Van Helsing に象徴される家父長というキーワードによって本作品を読み直すと、単純に男対女の衝突だけではなくより発展的な構造をも見出すことができるのではないか。

先程述べた通り、Van Helsing には司祭的な性質と同時に家父長的な性質が備わっている。彼の敵である吸血鬼は、女性の性衝動を喚起すると同時に母性を奪い去る存在であった。ヴィクトリア期においては母としての女性の領分は家であり、その役目は家の維持であったと言える。まさに“the angel in the house”だったわけである。そんな社会において、吸血鬼によって女性たちから母性が奪い去られ性的な奔放さが解放されると何が起こるのか。彼女たちは子供を育てなくなり、家庭から出て他の男と関係を結ぶようになるであろう。家を守り、家父長の配下であり家の財産ともなる子供を産み育てる女性が仕事を放棄すれば、家はたちまち崩壊し、その長である家父長は地位と権力どころかそれを発揮する場をも失ってしまうのである。

家父長の化身である Van Helsing は墮落していく娘とみなされる Lucy を助けるために宗教的な防御策をとるが、ニンニクの花による対策を、作品中唯一母という位置にある Westenra 夫人によって阻害されてしまう。それどころか、彼女は防御策の効能を誇る Van Helsing の自信をくじく発言をするのだ。

The Professor smiled, and looked quite *jubilant*. He rubbed his hands together, and said: —

“Aha! I thought I had diagnosed the case. My treatment is working,” to which she [Mrs. Westenra] answered: —

“You *must not take all the credit to yourself*, doctor. Lucy’s state this morning is *due in part to me*.” (148, emphasis added)

父の象徴である Van Helsing を、唯一の母である Westenra 夫人が虚仮にする。

ここにも家父長の権威の失墜が見てとれるだろう。加えて *Dracula* のイギリス上陸に伴い、Van Helsing 以外の父親的人物である Hawkins と Holmewood の父親が立て続けに他界してしまうことも、吸血鬼が家父長に及ぼす悪影響を示唆しているのではないかと考えられる。*Dracula* をフェミニズム的な観点から見ると、「女性を服従させたい男性」対「男性に反旗を翻す女性」という対立構造が読み取れるが、それに加えて自らの権威を保持したい家父長と家を崩壊に導く吸血鬼の対立構造も存在すると考えられるのである。家父長的勢力による吸血鬼退治は、女性を服従させて男性の権威を回復するだけでなく、家父長の権威と家庭の奪還をも意味すると言えるのだ。

・ 結論

以上のように、*Dracula* のテキスト内では、はじめに父権的な階層構造があり、その中に吸血鬼化した女性たちが現れ、男性を脅かし、既存のヒエラルキーを崩壊させ、それに危機感を抱いた男性勢力によって秩序の再構成が行われるという現象が起きていると考えられる。吸血鬼化してしまった女たちは母性を喪失して残忍に変わり、性的な奔放さを得るばかりか、その強烈な魅力によって男性を支配し得る危険な存在となるのである。男たちは女たちの謀反を許さず、杭打ちという極めて顕著な性的メタファーを伴う方法で罰を与えている。作品中において、吸血とは擬似的な性行為であり、*Dracula* の被害者たちは皆 *Dracula* と性的な関係を持ったことになる。しかし、吸血行為の本質は体液の交換であり、その点において Lucy と彼女に輸血をした男性たちもまた Lucy と性的な関係を持ったといえる。*Dracula* に抗わず、無意識のままに吸血を続けさせた Lucy はやがて墮落した女である吸血鬼となり、危険な女である吸血鬼 Lucy を男たちは滅ぼそうとし、Lucy に対して支配権を持つ婚約者の Arthur が杭打ちを行うのである。しかしてその方法を男性たちに提示したのは家父長的な Van Helsing であり、彼自身も夫を持たないふしだらな娘ともいえる女吸血鬼たちに罰を下している。墮落した女たちの処罰を家父長が指示していたという点は、この女吸血鬼と杭打ちが単なる男女間の性の問題ではないと言うことを示している。女性からの母性消失は子

供の育成に影響を及ぼし、その結果家父長は権力を行使する相手も場も失う。家父長こそが女性の家庭からの出奔により最も被害をこうむる存在だと考えられるのである。これは家父長の象徴である Van Helsing が数回に渡って母性の強い Mina を称賛したことからもうかがえる。

墮落した女吸血鬼たちは *Dracula* により男性的な攻撃性を与えられたが、逆に *Dracula* は男性から masculinity を奪ってもある。Harker がその最たる例だが、彼もまた家父長・Van Helsing の指揮下に入って、自らの masculinity を取り戻す。Mina もまた不貞の汚名を雪ぐためにトランシルヴァニアへ同行し、帰国後に出産をしている。健全な sexuality を取り戻した彼らが生み出したという結末は、女性の男性に対する従属と男性の女性に対する庇護こそが正しい男女の在り方だとしているようである。しかし、男女間の問題としてだけではなく、家父長という視点も交えたとき、この幸福な出産は新たな家父長 Harker の誕生とも言える。つまり、吸血鬼退治は、墮落した女たちの罰であり、奪われた sexuality の奪還であると同時に、家父長による家の統治というシステムの維持でもあるのだ。家父長 Van Helsing は息子のような年齢の若者たちを導き、彼らの masculinity や夫としての権威を取り戻させた。しかし単に頼れる父親・教師にとどまらず、結果的に彼は家父長制の継承という野望をも果たしたと言えるのである。

注

本稿は、日本英文学会九州支部第 63 回大会(2010 年 10 月 31 日、於九州大学)における口頭発表に加筆・修正を施したものである。

¹ Holmwood の名前は明記されていないが、引用部分の直前で Lucy の名前を出さずに“girl”と呼んでいることから、彼女と対応して Holmwood が“that poor boy”であると解釈した。

² ユダヤ教・キリスト教・イスラム教における最初の預言者であり、ユダヤ人・アラブ人の父祖とされる。

参考文献

- Aldridge, A. Owen, ed. *Comparative Literature: Matter and Method*. Urbana: U of Illinois P, 1969.
- Castle, Grerory. "Ambivalence and Ascendancy in Bram Stoker's *Dracula*." Riquelme 518-37.
- Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-De-Siecle Culture*. 1986. New York: Oxford UP, 1988.
- Dillistone, Frederick W. "The Fall: Christian Truth and Literary Symbol." Aldridge 144-157.
- Eltis, Sos. "Corruption of the Blood and Degeneration of the Race: *Dracula* and Policing the Borders of Gender." Riquelme 450-65.
- Foster, Dennis. "'The little children can be bitten': A Hunger for *Dracula*." Riquelme 483-99.
- Hennnelly, Mark M., Jr. "*Dracula*: The Gnostic Quest and Victorian Wasteland." Messent 139-55.
- Hughes, William. "Vampire." *The Handbook to Gothic Literature*. Ed. Marie Mulvey-Roberts. Houndmills: Macmillan, 1998. 240-45.
- Messent, Peter B., ed. *Literature of the Occult: A Collection of Critical Essays*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1981.
- Murfin, Ross C. "Combining Perspectives on *Dracula*." Riquelme 573-76.
- Nandris, Grigore. "The Historical *Dracula*: The Theme of His Legend in the Western and in the Eastern Literature of Europe." Aldridge 109-43.
- Phyllis, Roth. "Stoker's Vampires." *Bram Stoker*. Boston: Twayne, 1982. 111-26.
- Reed, John R. "The Occult in Later Victorian Literature." Messent 89-104.
- Riquelme, John Paul, ed. *Dracula: Complete, Authoritative Text With Biographical, Historical, and Cultural Contexts, Critical History, and Essays from Contemporary Critical Perspectives*. Boston: Bedford/St. Martin's, 2001.
- Senf, Carol A. *Dracula: Between tradition and modernism*. Boston: Twayne, 1998.
- Sova, Dawn B. "Dracula." *Literature suppressed on social grounds*. Rev. ed. NewYork: Facts on File, 2006. 117-119.
- Stoker, Bram. *Dracula: Complete, Authoritative Text With Biographical, Historical, and Cultural Contexts, Critical History, and Essays from Contemporary Critical Perspectives*. Ed. John Paul Riquelme. 1897. Boston: Bedford/St. Martin's, 2001.

Wicke, Jennifer. "Vampiric Typewriting: *Dracula* and Its Media." Riquelme 577-99.

丹治愛『ドラキュラの世紀末—ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』(東京大学出版
会、1997)